日本グループ・ダイナミックス学会会報

ぐるだい JGDA ニュース

The Japanese Group Dynamics Association

http://www.groupdynamics.gr.jp/

第 46 号

(2014 年 12 月 10 日)

発行所： 〒113-0033　東京都文京区本郷 7-3-1
東京大学人文社会系研究科 社会心理学研究室
日本グループ・ダイナミックス学会
E-mail：sec-general@groupdynamics.gr.jp
発行人：唐沢かおり　編集担当： 北村英哉

【目次】

§日本グループ・ダイナミックス学会第 61 回大会後記 …… 2
★大会準備委員長から： 安藤清志
§大会参加記 …… 3
藤井　勉
§優秀論文賞 …… 4
★受賞者の声：村山　綾
§優秀学会発表賞 …… 6
★受賞者の声：新井田恵美／平川　真／佐藤剛介／荻原祐二
§初めて論文を投稿したとき …… 10
鈴木公啓
§事務局からのお知らせとお願い …… 11
★研究の国際化支援制度（英文論文校閲補助）について
★実験社会心理学研究 掲載予定論文

§グルダイ学会関係連絡先 …… 12

★日本グループ・ダイナミックス学会第 61 回大会後記★

大会準備委員長　安藤清志（東洋大学）

本年度、第 61 回大会を東洋大学白山キャンパスで開催させていただきました。2 日間、とくに大きな問題もなくすべてのプログラムを完了させることができ、関係者一同ホッとしております。会員の皆様のご協力に心から感謝申し上げます。

本学会はこれまでも若手研究者が活躍し、毎年活気に満ちた大会が開催されてきましたが、今年の大会もその例に漏れず口頭発表やポスター発表の会場では賑やかに研究交流が行われました。また、今回はとくに東洋大学 HIRC21 との共催という形をとり、韓国から成均館大学の大学院生を招いて「特別ワークショップ」を開催しました。参加者は必ずしも多くなかったのですが、両国の若手研究者が自らの研究を披露し、お互いに良い刺激になったようです。海外からお招きしたホフマン先生、崔訓碩先生、南昌廣先生によるご講演も、期待していた通り大変興味深い内容でした。参加した方々は、直接お話を聴くことで先生方の研究の様子を身近に感じることが出来たのではないかと思います。

さて、準備委員会としても大会の目玉？として力を入れた懇親会。雨で煙ることもなく夜景を楽しみながら歓談していただけたことはよかったのですが、用意した料理が比較的短時間で底をつき、若い会員の方々には物足りなかったかもしれません。しかし、これは食欲旺盛な若い会員が多いということでもありますから、学会の将来が明るいことを証明した？ということでご容赦いただければと思います。

今回の大会では、学会員である東洋大学教員はもちろんのこと、非会員である学科の先生方や、現役大学院生と修了生、そしてアルバイトの学部学生が力を合わせて運営にあたりました。常にその中心にあったのが事務局幹事の尾崎由佳先生です。準備作業のプラニングから当日の運営に至るまで、細やかな心遣いとともに見事なリーダーシップで関係者を引っ張り、成功に導いてくれました。大会 2 日目、会場の後片付けが終わったのが午後 7 時。アルバイトの学生共々一室に集まり歓談していたところ、尾崎先生がスーツケースの中から取りだしたのは

数十本の冷えた缶ビールでした。「お疲れ様！」と声を掛け合って飲んだビールが格別の味だったことは言うまでもありません。大会の運営は大変ですが、得ることもたくさんあることを再確認した次第です。
来年は奈良で大会が開催されますが、本学の関係者一同、今度は大会参加者として楽しませていただきます。西道先生、よろしく！

★大会参加記★

藤井　勉（College of Humanities, Sungshin Women’s University）

2014 年 9 月 6 日から 7 日にかけて開催されたグルダイ学会第 61 回大会に参加しました。

会場の東洋大学は、私が修士 1 年として学会にデビューした日本心理学会第 71 回大会の会場でもあります。懐かしさとともに「もう 7 年も経つのか…」という驚きの気持ちも込み上げました。7 年前は「原稿」を用意し、お越しいただいた方に向かって読み上げるという、ある意味で目立つ発表スタイルだったことを（顔を赤くしつつ）思い出しました。あれから 7 年が経ち、もちろん原稿はなくなり、発表の準備もかなりライトになり、学会発表は気楽なものに変わりました。しかし今回は久々の口頭発表なので、直前までスライドを修正しながら臨みました。

今回発表したのは、潜在的自尊心の一指標である「Name Letter Task (NLT)」が、韓国においても使用可能か否かを検討し、日本人データと比較を行った研究成果です。結果としては、日韓ともに海外と同様にイニシャルへの選好が生起したことから、NLT が潜在的自尊心の指標として使用可能であるという内容でした。フロアの先生方からは、他の潜在的自尊心の指標（例えば IAT）との相関関係はどうか、アルファベットではなくひらがなや漢字の選好では測定できないか、といったご意見・ご質問をいただき、それにお答えするうちに、ポスター発表とはまた違った緊張感や面白さを感じることができました。ポスター発表は基本的に 1 対 1、または 1 対数人という形が多いですが、口頭発表はフロアにいらっしゃる方々の視線を浴びます。もちろん、他の先生のご発表に関心をお持ちでいらしている方も多いと思いますが、やはり多くの方を目前にしての質疑応答は緊張感があり、よい刺激になりました。口頭発表もポスターも、どちらも違った良さがあることを改めて実感した大会でした。

また、1 日目の午後は私が所属している NPO 法人（教育テスト研究センター: CRET）で実施した研究に関して、相川充先生、澤海崇文さん、中野友香子さんとの連名発表もありました。こちらはポスター発表を行い、多くの先生方から貴重なご意見を賜りました。学会発表でいつも感じるのは「それは気づかなかった！」という視点からのコメントをいただける喜びです。ご専門の異なる先生方からいただくご意見は、仲間内では気づかないこ

とが多く、たいへんありがたく感じています。

2 日目は日韓若手研究者インタラクションプログラムと題されたワークショップに参加しました。韓国の大学に勤める私としては、外せないワークショップでした。日本からは妬みの適応的機能、潜在的な自己不一致に焦点を当てたご発表があり、韓国からは外集団成員に対する援助に関わる問題、遂行水準が低い成員が存在する集団における課題遂行の問題に焦点化したご発表がありました。どれも興味深く拝聴し、特に潜在的な自己不一致のお話は、IAT を多く使用する私にとって刺激になりました。

日本には多くの心理学会がありますが、グルダイは私にとって本当に「ちょうどよい」学会です。大きい学会は発表やシンポジウムなどの件数が多く、「回りきれず途中でバテる」ことが多いのですが、グルダイは 2 日間の中に丁寧かつ上手に日程が組まれており、まったく息切れすることなく参加し、勉強できました。また来年も楽しみにしています。

最後に、大会の運営にご尽力いただいた準備委員会の先生方、スタッフの皆様に心から感謝申し上げます。また、私が発表したセッションは座長の柳澤邦昭先生と池内裕美先生が円滑に進めてくださり、とてもスムーズに発表を行うことができました。記してお礼申し上げます。

★優秀論文賞★

【受賞者の声】

●村山　綾・三浦麻子
集団討議における葛藤と主観的パフォーマンス
-マルチレベル分析による検討-
（第 53 巻 2 号 pp. 81-92.）

村山　綾（関西学院大学文学部・日本学術振興会特別研究員）
三浦麻子（関西学院大学文学部）

この度は、歴史ある学会の優秀論文賞を賜り、恐縮すると同時に、大変光栄に思っております。本論文執筆に当たり、ご助言くださった先生方、並びに、重要なコメントをくださった査読者の先生方、そして本論文を選考してくださった先生方に心より感謝申し上げます。

実は、本論文は早期公開していただいたタイミングと雑誌に掲載されたタイミングに少しラグがあり、審査対象となっていることを全く意識しておりませんでした。大会初日の朝に連

絡をいただき、最初は何かしらのドッキリではないかと疑ってしまったほどです（さすがに、「不必要に壮大すぎる」、ということで仮説を棄却しました）。少しずつ状況を理解し、急遽大会に参加するため新幹線に飛び乗りました。会場に到着すると、実に（本当に！）多くの先生方が受賞に関して「おめでとう」と声をかけてくださいました。自分の研究活動に関わる人脈は、この学会を通して培われてきたのだと改めて感じられる貴重な経験となりました。

本論文のもとになった実験データは、大阪大学大学院人間科学研究科の博士後期課程在籍時に、大坊郁夫先生（現・東京未来大学）のご指導の下で収集したものです。集団研究では、実験条件による集団の所産の違いが興味関心とされることが多いですが、そのような研究に携わる際、主に 2 つ、困難に直面することがありました。1 つは、データの分析方法です。集団実験の測定変数は、集団レベルと個人レベルの変数が入れ子状態になっており、それらを適切に扱わないと、サンプル数を不当に多く見積もったり、逆にサンプル数が少なすぎて妥当な分析を行えないという問題がありました。この点について、本研究では集団レベルの変数と個人レベルの変数を同時に組み込んだ分析（階層線形モデル）を行い、上述した問題を軽減することができました。

2 つ目の問題は、集団の所産に注目するあまり、集団内でのコミュニケーションプロセスに関する議論がしばしば放置されたまま研究が進んでしまうという点です。そこで本研究では、プロセスに関わる変数、特に集団内での意見の相違や対人的な軋轢に関わる変数を多面的に測定しました。そして、それらがさまざまな形で集団の所産（本研究では、主観的なパフォーマンス）に影響することを示しました。

以上のように、自分の前に立ちはだかった壁を、共著者である三浦麻子先生との多くの議論を経て、自分なりに壊して論文の形にまとめられたことが、結果として望外の評価をいただくことにつながったのだろうか、と、後付けも甚だしいですが考えてみました。近年では、このような問題意識を法的な意思決定場面に持ち込み、その個人・集団プロセスを対象に研究を進めています。研究を進めていく上で何か困難に直面した際には、このたびの受賞を思い出し、また壁を壊して前に進んでいけるよう、精進します。引き続き、ご指導・ご鞭撻賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。**（執筆：村山　綾）**

★優秀学会発表賞★

【受賞者の声】

＜ロング・スピーチ部門＞
●新井田恵美・堀毛一也
評判が男性の短期配偶戦略に及ぼす影響

新井田恵美（東洋大学大学院社会学研究科）
堀毛一也　（東洋大学社会学部）

このたびはこのような名誉ある賞をいただき、たいへんありがたく存じます。審査員の先生方、本研究に対して貴重なご意見、ご質問をくださいました諸先生方にあらためて心より御礼申し上げます。

本発表は、男性の短期配偶指向を規定する要因について検討したものです。男性の短期配偶行動は女性のそれに比べてベネフィットが高いため、男性の方が短期配偶行動をおこないやすい、ということは頑健な現象とされています。しかし、男性の短期配偶にもコストがないわけではなく、とくに他者に知られると、様々なコストが生じることが指摘されています。そこで本研究では、短期配偶行動が評判となる可能性を操作し、それが男性の短期配偶指向を調整するかどうかを検討しました。実験の結果、上記の可能性が低い場合には、男性の方が女性に比べて短期配偶指向が強い一方で（先行研究の知見が再現されていました）、上記の可能性が高い場合（質問紙の注意事項欄に目を挿入した場合）には、性差はなくなっていました。このことから、男性の短期配偶行動は状況的な制約を受けることが示唆されました。

最後になりますが、この場を借りて東洋大学の先生方、院生の皆様に感謝の言葉を述べさせていただきます。指導教官である堀毛一也先生は、いつも私のことを気にかけ、どんなときでもサポートして下さいます。また安藤清志先生、大島尚先生をはじめとして、多くの先生方にあたたかいご指導をいただいております。おおぜいの同僚や先輩・後輩たちとも、いろいろな研究領域に関する議論をしながら毎日過ごし、刺激を受けています。このような環境で研究ができることに感謝します。本賞を励みとし、これからも研究を進めていきたいと考えております。（**執筆：新井田恵美**）

＜ショート・スピーチ部門＞
●平川　真・清水裕士・鬼頭美江
友人査定戦略としての間接的要求(2) ～関係流動性の調整効果～

❀ **平川真（広島大学／日本学術振興会）**
清水裕士（広島大学大学院総合科学研究科）
鬼頭美江（北海道大学大学院文学研究科）

このたびは名誉ある賞をいただきとても光栄に思います。今回のことで、周囲の方々と議論し研究を洗練させていくことの重要さ、面白さを強く感じることができました。共同研究者のお二人との議論がなければ仮説の構築はできませんでしたし、本発表で提案した仮説の骨子はいくつかの場で発表しておりますが、その度に多くの先生方から仮説の妥当性や言葉の選びかたについてまで、多岐にわたるアドバイスをいただくことができました。正直、はじめはあまり感触がよくなかったこの仮説ですが、徐々に洗練させることで今回の評価をいただくことができたと思っています。本当にありがとうございました。

本発表の問題意識は、間接的要求の使用における文化差をどのように説明するか、というものです。間接的要求とは、たとえば「この部屋暑いね」という発話で「窓を開けて」という要求の意味を伝える、いわゆる遠まわしな頼み方です。間接的要求は北米よりも日本でよく用いられると指摘されており、その文化差は相手への配慮の観点から説明されてきました。しかし、私がこれまで行ってきた研究結果からは配慮による説明が支持されておらず、他の説明原理を探す必要がありました。そこで今回提案した間接的要求の友人査定仮説は「日本のような、関係が固定化されている環境においてのみ、間接的要求が自分のことを大切に思っている人をみつけるために用いられている」というものです。今回は関係流動性尺度を用い、日本国内サンプルでの検証を行いましたが、現在アメリカでのデータを収集中ですので、次の機会に報告させていただきます。

言語に関する研究は言語現象を記述する方向性の研究が主流であり、「現在確認されている言語現象がなぜそのような形で存在しているのか」を考える研究は少ないのが現状です。本研究では、そのような言語現象に関する問いを扱う際に、社会心理学的なアプローチが貢献できる一例を示せたのではないかと思っています。（**執筆：平川　真**）

＜English Session 部門＞

●佐藤剛介

A socio-ecological approach to other focused type of social anxiety: A cross-national comparison

佐藤剛介（名古屋大学学生相談総合センター障害学生支援室）

この度はこのような学会発表賞を頂き、大変光栄です。ご多忙な中、ご選考頂きました先生方やそれに関わられた皆様に感謝を申し上げます。

本発表は、他者に迷惑をかけていないかといった「他者志向的社会不安」（対人恐怖）の文化差を扱いました。この社会不安の文化差は、従来個々人によって内在化された文化的価値感の差異による説明がされてきました。つまり、例えば集団主義的な文化である日本では、人々が集団主義傾向を内在化し、それがゆえに周囲の人々に不愉快な思いをさせていないか、迷惑をかけていないか気になってしまう。その一方で、個人主義的な文化である北米では、他者志向的な社会不安を持ちにくいという説明です。こういった文化差を、対人関係の組み替え機会（関係流動性）という社会環境の違いで説明する。これが本研究です。対人関係の組み替え機会の少ない社会や地域では、一度排斥されてしまうと代替他者が見つかりにくく、そのコストは大きい。したがって、排斥されないように他者志向的不安が高くなるという仮説です。文化間だけでなく、国内の地域差に対しても説明が可能か検討しています。

実は、私は臨床心理士です。北海道大学で修士・博士の学位を頂いたのですが、他大学院で臨床心理学修士ももらっています。北大へ行こうと思ったのは比較文化研究のヤングライオンこと結城雅樹教授（当時助教授、私にはヤングライオンに見えました笑）がおられたからです。既に臨床心理学修士号を持っていた私は博士後期課程から入学させてもらおうと。ところが、そこで登場したのは「こころでっかち」で有名な某大先生です。「博士課程・・うーん、修士からだな」という一言で、私「・・・はい」。とりあえず修士課程合格を目指すことになったわけですが、すでに修士課程の後期入試は終了。博士後期課程まで進学する、また途中で“コケる”可能性を考えると、研究生のお話はお断りし、安全策として私はお金を稼ぎにいくことに。2 年間帯広畜産大学で学生相談の仕事をして、北大にやっと入れてもらい、今日までの道のりを歩くことになりました（某大先生の方針は正しかった）。

臨床心理学は、人の「個別性」を重視し、「個」にフォーカスするため、特に「こころでっかち」な傾向があります。ちょっとでっか過ぎやしないかと思うことも多く、そのため、社会心理学の知見でもって、そのでっかくなってるところを少し削り取ってやろうと考え

た。本研究は、まさにそれが形になっています。この受賞を励みとし、研究をさらに進めて、今回のように英語で知見の発信を行っていきたいと考えております。
（写真は、マッサンブームにのって、余市ウイスキー工場での一枚です。運転手だったので、「飲むな」シールを貼っています。）

＜ポスター発表部門＞
●荻原祐二・内田由紀子・楠見孝
日本の個人主義者は孤独か？ 日本における個人主義と対人関係

❀ 荻原祐二（**京都大学大学院教育学研究科**）
内田由紀子（京都大学こころの未来研究センター）
楠見孝（**京都大学大学院教育学研究科**）

この度は、優秀学会発表賞という貴重な賞をいただき、誠に嬉しく光栄に思います。審査していただいた先生方、発表に対してコメントや質問をいただきました先生方に厚く御礼申し上げます。そして、常日頃からご指導いただいている先生方・先輩方、共に議論を重ね刺激を与えてくれている同期・後輩の皆様、調査に参加してくださった皆様に感謝致します。

本発表では、日本において個人主義的な人は親しい対人関係が少なく、孤独を強く感じているのではないか、という問いについて実証的に検討しました。日本社会は、個人の独立や個性をより重視するような個人主義化の方向へ進んでいると言われています。特に、成果主義制度などの個人主義制度は、広く社会に浸透しています。こうした個人主義制度は、内発的な動機づけを高め自由競争を促すことによって生産性を高めたり、関係性のしがらみや束縛から解放するといったポジティブな心理的帰結をもたらしてくれるだろうという期待とともに取り入れられてきた側面があります。しかし、こうした変化からポジティブな帰結が本当に生み出されているでしょうか。欧米と異なり、日本は歴史的には個人主義文化ではありません。よって、個人主義を取り込もうとしても、歴史的に集団に共有されてきた価値観や規範は依然としていわゆる集団主義的なものであり、個人と集団の間に葛藤が生じている可能性があります。この問題について検討した先行研究では、日本において個人達成志向性が高い人は、親しい友人の数が少なく、幸福感が低いということが示されています（そしてアメリカではこの関連は見られない; Ogihara & Uchida、 2014）。本発表では、このネガティブな関連が親しい友人においてのみ生じているのか、対人関係全般において生じているものなのかどうかを検討しました。

大学生を対象に調査を行ったところ、個人達成志向性は親しい友人の数に加えて、悩みを相談できる人の数と負の関連にあり、孤独感とは正の関連にあることがわかりました。本研究から、少なくとも現在の日本において、個人主義傾向は良好な対人関係と負の関連

にあることが示唆されたと言えます。どのように個人と集団の葛藤が生じているのか、この問題は時と共に解決していくのか、など検討すべき課題は数多く残っています。

本学会には初めて参加させていただいたのですが、様々な研究領域の方から大変貴重なコメント・質問・激励を数多くいただき、非常に生産的で、なにより楽しい時間を過ごすことができました。この受賞を励みに、より一層精力的に研究活動に取り組んでいきたいと思います。今後とも、皆様と議論をさせていただけますと非常に幸いです。

（執筆：荻原祐二）

★初めて論文を投稿したとき★

鈴木公啓（東京未来大学）

初めて論文を投稿しようとしたのは、確か修士課程の院生の時だったと思う。遠方の研究仲間の中で論文投稿が話題になっており、見事に触発されて、「よっしゃ、いっちょ論文を投稿してみようかな」と安易にやる気になってしまったのだったと思う。そして、その頃に興味を持っていたテーマで論文を書き、某学会のショートレポート（どこかバレバレである）に投稿。それまで紀要を一本書いた事があるか無いかぐらいのペーペーであり、そんな人間が、論文を投稿しようとしたわけで、無謀もいいところであった。ありがたい事に、一発リジェクトとはならず、コメントとともに戻ってきた。問題はこれからである。どうやって直して、どうやって返事をすればよいか、まったくわからない。近く（先輩やその他もろもろ）には、ろくに投稿経験がある人がおらず、尋ねる事もできない。お世話になっていたとある先生にお願いし、内容を見ていただきつつ、返事のやり方等々教えて頂いてどうにか再投稿。その後、何度やりとりしたかは覚えていないが、最終的にはどうにか採択された。今思えば怖いもの知らずで、勢いでどうにか採択にこぎ着けたようなものである。けっこう前の話である。なお、この時に指導していただいた査読プロセスへの対応の仕方が、今のやり方の原型となっているように思われる。

その後、ショートということに満足いかず、次の論文執筆に取り組んだ気がする。初めの論文とその後の数本は、今から思えば、論文としての体をなしておらず、見たくもないようなレベルとしか言いようがない。ほんと、勢いとは怖いものである。なお、その頃に、これまた研究仲間達に触発されて、英語論文を執筆してみたりした。一度リジェクトされ、次のところでリジェクトされ、そして３つめの雑誌でようやくどうにか採択へとこぎ着けた。身の程を知らず、積極的にいろいろチャレンジしていた時期といえる。その後、博士課程の院生となり、引き続き論文を投稿し、そして現在も、どうにか比較的コンスタントに論文投稿をおこなっている。

若くて勢いのあるうちに、リジェクトを恐れずに投稿を重ねていくことがとても大事なように思う。ただでさえ、年月が経つにつれ、論文執筆のためのまとまった時間も確

保しにくくなる。場合によってはモチベーションを維持するのも大変になる…らしい。就職してから論文投稿の仕方を学んでいくというのは難しいといえる。ちなみに、経験によっては、リジェクトが次第に怖くなってくるということもあるようである。ともあれ、論文執筆の習慣を早い時期に形成しておくことが重要といえるであろう。

若いうちにいろいろとチャレンジしたおかげで、いつのまにかなんとなく論文執筆の「作法」が少しは見えてきたような気がする。1 にも 2 にも、ストーリーに筋を通し、そして、心理学の論文としての形式を守る、というのが大事なように思える。それをしっかりと守れば、採択される可能性は高まると考えられる。なお、論文を投稿すればするほど良い論文を書けるようになるかといえば、必ずしもそうではないと思う。まずは論文の最低限の作法を学ぶ必要がある。その上で、査読のやりとりでさらに作法をさらに学んでいく必要がある。査読者として投稿論文を査読する際に、論文の体を成していない論文に出会うことがある。チャレンジも大事だが、まずは研鑽を重ねることを忘れてはいけない。投稿前に最低限の準備をすることは必須である（かといって、臆病になりすぎても投稿できなくなるようなので、バランスは難しいのかもしれないが）。

初めての論文投稿は、確かに大変といえる。しかし、勢いがあり、かつ、比較的時間にゆとりがあるうちに、積極的に論文の書き方を学び、そして投稿し、論文の作法を学ぶ事をお勧めしたい。その頃に作法をある程度身につけておけるかどうかが、就職してからの（論文執筆をはじめとする）様々な研究活動に影響するように思われる。

★事務局からのお知らせとお願い★

【研究の国際化支援制度（英文論文校閲補助）について】

この制度は、本学会会員の研究の国際化を支援するため、会員が自らの研究成果を英文誌に投稿する際に英文校閲代金の一部を補助するものです。年齢制限などありませんので、奮ってご応募ください。詳細は学会ホームページをご参照下さい。
(http://www.groupdynamics.gr.jp/support_international.html)

【実験社会心理学研究 掲載予定論文】

■ 2014 年度　54 巻 2 号　掲載予定論文　（2015 年 2 月発行予定）

原著論文

田端拓哉・池上知子（受付番号 1304，受稿 2013/3/10，受理 2014/9/1）
能力次元における自己評価への脅威が集団実体性の知覚に及ぼす影響

上原俊介・中川知宏・田村　達（受付番号 1315，受稿 2013/12/25，受理 2014/9/23）
怒りの利己性：公正敏感さは怒りの道徳感を誘起するか

資料論文

杉浦 仁美・坂田 桐子・ 清水 裕士（受付番号 1218，受稿 2012/12/7，受理 2013/12/9）
集団間と集団内の地位が内・外集団の評価に及ぼす影響―集団間関係の調整効果に着目して―

田戸岡好香・石井国雄・村田光二（受付番号 1302，受稿 2013/1/11，受理 2014/8/12）
競争意識が嫉妬的ステレオタイプ抑制後のリバウンド効果に及ぼす影響

上記論文のうち、杉浦論文は早期公開を行っています。
https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jjesp/advpub/0/_contents/-char/ja/

★グルダイ学会関係連絡先★

本学会では、事務支局を中西印刷株式会社に開設しております。入退会、住所・所属等変更、会費納入、機関誌等の未着・メールマガジンなどのメール配信先の登録・変更・停止等の連絡先は、事務支局である中西印刷株式会社までご連絡ください。

また、論文投稿先・審査書類送付先も中西印刷株式会社となっております。詳細は下記をご覧ください。各種お問い合わせの具体的な連絡先は以下の通りです。

◆事務支局【入退会、住所・所属等変更、その他お問い合わせ先】
日本グループ・ダイナミックス学会事務支局
〒602-8048　京都市上京区下立売通小川東入
中西印刷（株）学会フォーラム内
電話：075-415-3661
FAX：075-415-3662
E-mail：jgda@nacos.com

◆学会運営・対外業務関連
日本グループ・ダイナミックス学会本部事務局
〒154-8533 東京都世田谷区太子堂 1-7-57
昭和女子大学　人間社会学部心理学科　藤島喜嗣研究室
電話：03-3411-2945
E-mail：sec-general@groupdynamics.gr.jp

◆投稿論文・学会誌編集関連
日本グループ・ダイナミックス学会　編集事務局
〒602-8048　京都市上京区下立売通小川東入る中西印刷（株）営業部編集校正課内
電話：075-441-3155
FAX：075-417-2050
E-mail：jjesp-hen@groupdynamics.gr.jp

編集委員長
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 首都大学東京人文科学研究科　沼崎誠
E-mail：numazaki@tmu.ac.jp

◆広報関連
【ぐるだいニュースの編集・記事の投稿、メールマガジンへのニュース記事投稿、新刊案内や研究会案内等のニュース記事、公募情報など】
〒564-8680　大阪府吹田市山手町 3-3-35
関西大学社会学部心理学専攻　北村英哉研究室
E-mail：office@groupdynamics.gr.jp までお送りください。
また、マガジンに関するご希望・お問い合わせ等も、同アドレスまでお送りください。

【編集後記】
あっという間に 12 月…ということで、街はすっかりクリスマス気分ですね。大学によっては、すでにイルミネーションが灯っているキャンパスもあるのではないでしょうか？師走といえば「忙しさ」の象徴でもある時期ですので、皆様くれぐれも風邪など召されませぬようご自愛くださいませ (編集子)